様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：４０１２４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３２７５

研究課題名（和文）スポーツ通訳者に求められる技術と役割の解明

研究課題名（英文）Study on the roles expected of sports interpreters and their interpreting strategies

研究代表者
板谷　初子（ITAYA, Hatsuko）

北海道武蔵女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：６０７４７３６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スポーツ通訳において通訳者が果たす役割とスポーツ特有の訳出方略の解明を目指した。研究対象は最も早くから通訳者を導入してきたプロ野球通訳とした。文献研究、球場での参与観察、野球通訳者等へのインタビューを行い、そのデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して分析した。その結果、プロ野球通訳者の役割は、言葉を訳す「言語的役割」よりも、言葉以外の場面で選手をサポートする「社会的役割」が中心であることがわかった。訳出方略に関しては、選手のコンディション、球団の勝利、ファンへの配慮などの理由で、通訳者は場面に応じて、「忠実性」及び「正確性」の原則から逸脱することが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
通訳学研究の対象としてスポーツ通訳に焦点を当てた研究はこれまでに見当たらない。アスリートたちが国境を越えて活躍の場を広げ続ける中、スポーツ通訳者の果たす役割も大きくなると予想される。本研究の結果、プロのスポーツ通訳者は状況に応じて意図的に「正確性」「忠実性」の大原則から逸脱することが確認された。またスポーツ通訳者に求められているのは、言葉を正確に訳す「言語的側面」ばかりでなく、選手が能力を発揮しやすい環境を整える「社会的側面」であることが分かった。この研究の成果は、将来スポーツ分野で通訳をするプロ及びボランティアの通訳者に、スポーツ通訳者に求められる資質に関する情報を提供した。

研究成果の概要（英文）：This paper aims to identify the roles that interpreters play and effective interpreting strategies in the arena of professional baseball, and hence to explore the expectations held of sports interpreters in general. The data obtained through ethnographical observation at ball parks and interviews of baseball interpreters as well as non-Japanese baseball players were analyzed under a method called modified grounded theory approach (M-GTA). As a result, this study reveals that more importance is attached to interpersonal or social roles than cognitive or linguistic roles in baseball interpreting. In regard to interpreting strategies, instances have been observed when baseball interpreters intentionally deviated from the principles of faithfulness and accuracy in order for players to get into good physical and mental condition, and also out of the consideration for fans' feelings.

研究分野：通訳学

キーワード：スポーツ通訳　プロ野球通訳　通訳者役割　通訳者アイデンティティ　訳出方略

１．研究開始当初の背景

通訳学の領域では、医療通訳、司法通訳を初めとして様々な分野における研究がなされてきたが、スポーツ通訳を対象にした研究は行われてこなかった。一例を挙げると、日本通訳翻訳学会の学会誌『通訳研究』の創刊号（2000 年）から第 7 号（2007 年）までと、その後名称が『通訳翻訳研究』と変更された第 8 号（2008 年）から第 16 号（2016 年）までに掲載された全投稿 312 件中、スポーツ通訳をテーマにしたものは 1 つもない。日本の通訳学研究者がスポーツ通訳をとりあげてこなかったのには、2 つの理由が考えられる。第一に、これまでスポーツ通訳は、一通訳領域として広く認知されてこなかったことが挙げられる。代表的な通訳学入門書（北林ほか 1998； 石黒 2007； 友野ほか 2012； 鳥飼 2013）においてスポーツ通訳への言及がなされていない事実からも、このことが推測される。二つ目の理由は、研究者によるフィールドへの参入が困難であるということだ。スポーツ通訳が必要になる場面は、アマチュアスポーツの場合、オリンピックに代表されるような、その注目度がきわめて高い国際的スポーツイベントである。プロスポーツの場合は、プロ野球やプロサッカーのように多国籍の有名選手が多く活躍するプロスポーツである。どちらの状況においても、選手のコンディションを乱さずかつ安全性を確保するために、フィールドから研究協力の承諾が得にくいことが予想される。これらの理由により、スポーツ通訳研究は積極的に行われてこなかったと考えられる。

今後日本では、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに代表される数多くの国際スポーツイベントの開催が予定されている。このようなイベントでは、一度に多くの通訳者が必要となるため、スポーツ通訳未経験者や、通訳訓練を受けていないバイリンガル話者による lay interpreting （素人通訳）（Pöchhacker, 2004, p.22）が行われる可能性が高い。また 2015 年に設立されたスポーツ庁が、スポーツを通じた国際交流の促進をその目標の一つに掲げていることから（文部科学省 2016）、スポーツ通訳者が必要とされる場が増加することが期待される。そのため、スポーツ通訳者の内側の論理やローカルな知にアクセスし、スポーツ通訳というフィールドで蓄積された暗黙知を明らかにすることは、通訳学における既存研究の間隙を埋め、通訳実務に貢献すると考える。

２．研究の目的

本研究では、国民的娯楽として多くの日本人が長く親しんできたプロ野球の球団通訳者に焦点を当てる。プロ野球球団が正式に通訳者を雇用したのは半世紀以上前のことであり（牛込 1993）、スポーツ通訳の中で最もその歴史が長い。そのため本研究は、プロ野球の球団通訳者が果たす役割の諸相と彼らが採用している訳出方略を明らかにすることで、スポーツ通訳に対する知見を得ることを目的とする。

３．研究の方法

(1)インテンシブ・インタビュー

16 人の調査対象者に対し、2015 年 12 月から 2016 年 11 月の期間にインテンシブ・インタビュー（Charmaz, 2006）を行った。自由な語りの中から「研究参加者が各々持つ自身の経験に対する解釈を引き出す」（シャマーズ 2008, p.32）ことを目指して、質問項目は最小限にとどめた。1 人あたりのインタビュー時間は、最短で 17 分から最長で 4 時間に及び、合計時間は 26 時間 37 分となった。インタビュー時間の平均は、通訳者の場合 2 時間 2 分、外国人選手の場合は 28 分であった。インタビュー内容は調査対象者の許可を得て IC レコーダーにて録音し、後に書き起こしを行った。

書き起こしたデータはグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach, 以下 GTA）を援用して、分析を行った。M-GTA を援用した理由は、データの切片化を行わない分析法にある。特定語句や表現だけをキーワード的に拾い出していく代わりに、データの背後にある意味の流れを読み取り、コンテクストを解釈しながらデータを意識化・言語化する M-GTA が、本研究の「自由な語り」と「豊富なデータ」の解釈には適切だと判断した。

(2)エスノグラフィー観察

球団 A の試合が 18 時からホームグラウンドで行われる日には、通常 14 時から 16 時まで練習が行われる。その時間に 3 塁ベンチ前に設けられているマスコミ待機スペースに入る許可を得て、練習時における通訳者の動きを観察した。観察時に気がついたことをメモに書くとともに、ビデオカメラで通訳者の映像を撮影した。

選手が練習を終え控え室に戻る際にテレビ局のアナウンサー、新聞・雑誌記者などが選手に質問をする囲み取材が行われることがある。その場合、取材時の通訳場面を録画して、ヒーロー・インタビュー時の通訳と比較し、通訳方略に違いがあるかどうかを調べた。

(3)通訳音声テクスト分析

2016 年度パ・リーグ公式戦全試合のヒーロー・インタビューにおける原発言と通訳内容のテクスト比較を行った。通訳者の訳出が原発言と大きく異なる場合には、その音声を文字に起こし、どのような部分で逸脱が行われているのかを調べた。その後、さらに多くの通訳事例でテクスト比較をすることを目指し、「パ・リーグ TV」という動画サイトで提供されている 2012 年のシーズンにまでさかのぼり、それ以降のヒーロー・インタビューを視聴し、逸脱している

と思われる訳出とその原発言をテクスト化して、考察した。

(4)訳出時間計測
2016 年度パ・リーグ公式戦全試合の、ヒーロー・インタビュー通訳時におけるインタビューアーの発言、外国人選手の発言、通訳者の通訳それぞれに費やされた時間を計測した。計測はスマートフォンのストップウォッチ機能を用いて筆者が 10 回計測し、その平均値の下三桁目を四捨五入した。通訳音声が聞こえない場合には、映像で口の動きを観察して発話時間を計測した。しかしながら、通訳者の顔が映像に映っていないときには、日本語から英語への通訳時間は計測できなかった。他方、選手の発言を日本語に通訳した音声は、ファンに向けてマイクを通して発声されたため、すべて通訳時間を計測することができた。さらに、囲み取材の通訳場面でも同様の計測を行った。

４．研究成果

本研究では大きく分けて 2 つのことを明らかにしようと試みた。1 つはプロ野球の球団通訳者が果たす役割の諸相を明らかにすることであり、もう一つは彼らが採用している訳出方略を明らかにすることである。最終的には、スポーツ通訳に対する知見を得ることを目的とした。

(1)球団通訳者の役割

球団通訳者誕生の典型的なプロセスは次の通りだ。①野球またはスポーツに深く関わってきたこと　②外国語を話せること　③野球業界に人脈があること、の 3 つの条件が重なると、人づてに声がかかり、球団通訳者になる。①に関しては、プロ野球選手やトレーナーなどを目指してアメリカへ留学をしていた例が多く、語学留学者は皆無だった。業界参入時の通訳観は野球業界参入手段である。非通訳者というアイデンティティを持ちながら通訳業務を行い、自己効力感は低く、通訳という仕事を最終目標への通過点ととらえている。役割期待としては「言語的役割」よりも「社会的役割」の要素が圧倒的に大きい。業務を続ける中で役割過多が原因で役割葛藤が生じている。また、役割を遂行する社会的自我（黒衣）と、理想の自我（役者）との間の役割距離が拡大し、その結果、欲求充足はあるものの、転職という形で役割変更（黒衣から役者への転身）が行われた事例が数多く確認されている。図 1 に球団通訳者の役割変化のプロセスを示す。

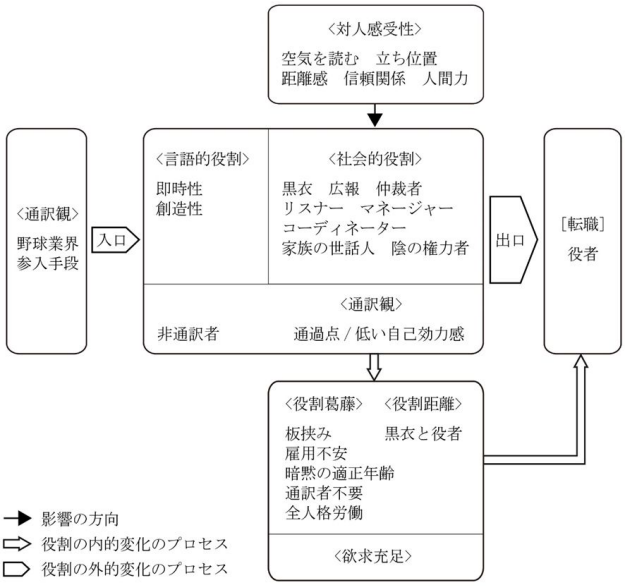

図１　球団通訳者の役割変化のプロセス

(2)球団通訳者が採用する訳出方略

プロ野球通訳では、勝負及びエンターテイメントという二つの条件を満たすために、訳出には即時性と創造性が要求されることが確認された。即時性とは端的に言うと、間を置かず速やかに短時間で訳すということである。即時性は通訳の本質であるが、スポーツ通訳ではとりわけその重要性が高い。インタビューをした 12 名の現役及び元通訳者のうち、9 名が即時性の重要性について言及していた。発言例として「遠回しになったらもう終わりなんですよ...全部訳してたら選手もいらいらする、なんせ投げて打つ世界だからスピード感が必要なのよ」「会議通訳とかとはまたちょっと違って、ほんともう限られた時間の中で、みんなが焦ってる」などが挙げられる。球団通訳者はスピード感を維持するために「情報を絞って訳す」「手で指し示して言葉をあまり使わない」などの方略を用いている。このような即時性は、要点だけを訳すことで実現されるほか、創造的訳出により可能になることが、本調査で明らかになった。創造的訳出とは、意図的に原発言から逸脱する訳し方である。ヒーロー・インタビューにおける創造的訳出例を次に示す。通訳時間は、筆者がストップウォッチで 10 回測定をした平均値である。

【2015 年シーズン　ヒーロー・インタビュー】
インタビューアー：ただ、そのタイムリーツーベースヒットを放った後、打った瞬間、すぐに

は走り出しませんでしたよね？（発声時間 6.31 秒）
通訳者 A：（音声は不明。0.77 秒で訳しているのを口の動きから測定。）
外国人選手：Sorry，uh…sorry.
（中略）
インタビューアー：今日の○○（球団名）を勝利へ導く同点タイムリーツーベースヒット、お寿司のネタにたとえるなら何でしょうか？（発声時間 6.08 秒）
通訳者 A：（音声は不明。0.87 秒で訳しているのを口の動きから測定。）

A 氏は、2 回の通訳で、共に 6 秒以上の原発言を 1 秒以下で訳出した。最初の訳出では、専門用語知識を利用して、即時性を確保している。A 氏によると、「ホームランを打って、かっこつけてすぐに走り出さない行為」を “pimp” と言うそうだ。そのため “You pimped it. Why?” と訳出したそうである。次の訳出では、“What's your favorite sushi?” と訳したそうだ。A 氏は、このような奇抜な質問をそのまま訳すと、選手が混乱して的外れの答えが返ってくるという自身の経験から、瞬時にこのような創造的訳出をしたそうである。このような創造的訳出方略を是とするか非とするかは、賛否両論に分かれるところである。通訳の原則は「忠実性」と「正確性」であることは議論の余地がない。しかし状況に応じて選択的、創造的訳出ができることこそが通訳者の付加価値である（木村 2017）という側面も否定できない。プロスポーツは、スポーツエンターテイメントでもあり、観客がいなければ成り立たない（河島 2013）。A 氏が「ヒーロー・インタビューはファンの方に楽しんで頂くときなので、なるべくおもしろおかしく訳しています」と語っているように、通訳翻訳の目標（スコポス）に焦点を当てる機能主義的アプローチの観点からすると、ヒーロー・インタビューにおける通訳行為は単なる言語変換ではなく、選手とファンを「つなぐ」行為である。訳出の際にはコミュニケーションの目的を意識する必要があり、唯一無二の正しい訳出法は存在せず、目的によって訳出方法は変わることがあり得る（木村 2017; 武田 2013）。この場面で A 氏は、スコポス理論に基づいた訳出方略を選択していたと言える。

ヒーロー・インタビューにおける訳出時間に注目することからも球団通訳者がスコポスに応じた訳し分けをしていることがわかる。2016 年シーズンのパ・リーグ全球団で、複数回通訳をした通訳者 11 名による合計 70 回のヒーロー・インタビューでは、選手の発言は原発言の 93.2%の平均時間で訳出されているのに対し、アナウンサーの日本語は原発言の平均 55.4%の時間で訳されていた。このことから、A 氏に限らず球団通訳者たちは、選手に対しては簡潔に訳すことを心がけ、ファンに対しては選手の言葉を丁寧に伝えようとしていることが推測できる。

同様の訳し分けは、異なる状況間でも確認された（表 1）。A 氏は、ヒーロー・インタビューで選手に質問内容を伝えるときには、原発言の三分の一以下の時間で訳出しているが、囲み取材でこの傾向は確認されなかった。筆者がこの事実を A 氏に伝え、これが意図的行為であるかどうかを確認したところ、次のような回答を得た。ヒーロー・インタビューでは、ファンが選手の発言を待っているため、アナウンサーの質問の直後に選手が答えられるように短時間で訳出をする一方、囲み取材の内容は新聞に掲載される可能性が高く、またテレビの放映時間のような時間の制約もないため、ゆっくり、正確に訳すよう心がけているという説明であった。以上のように、球団通訳者はスコポスに応じて様々な訳出方略を駆使していることが判明した。

表 1　A 氏の通訳状況による通訳時間の違い

	外国人選手の発言時間に対する通訳時間(%)	質問者の発言時間に対する通訳時間(%)
ヒーロー・インタビュー平均	97.80%	31.16%
囲み取材平均	96.17%	113.06%

【引用文献】

Charmaz, C. (2006). *Constructing Grounded Theory-A Practical Guide Through Qualitative Analysis.* Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies.* London/New York：Routledge.

木村護郎クリストフ（2017）「つながり方を探るドイツ・ポーランド国境地域―異言語間コミュニケーションの諸方略」平高史也／木村護郎クリストフ共編『多言語主義社会に向けて』pp.194-206 くろしお出版

石黒弓美子 （2007） 「通訳の種類と特徴」 日本通訳者協会（編） 『英語通訳への道』 pp.48-50 大修館書店

河島徳基 （2013） 『スポーツ業界の歩き方』 ぱる出版

北林利治・杉山泰・ボナン，R. 西村友美（1998） 『初めて学ぶ翻訳と通訳-言語コミュニケーション入門』 松柏社

文部科学省 （2016） 「特集 1　スポーツ庁の創設とスポーツ政策の推進」『平成 27 年度文部科学省白書』【Online】

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201601/detail/1376605.htm （2017 年 12 月 1 日）
シャマーズ, K. (2008) 『グラウンデッド・セオリーの構築-社会構成主義からの挑戦』 （抱井尚子・末田清子監訳） ナカニシヤ出版 〔原著：Charmaz, C. (2006). *Constructing Grounded Theory-A Practical Guide Through Qualitative Analysis.* Thousand Oaks, CA: Sage Publications.〕
武田珂代子 （2013） 「機能主義的アプローチ（スコポス理論）」 鳥飼久美子（編） 『よくわかる翻訳通訳学』 pp.122-123 ミネルヴァ書房
友野百枝・宮本友之・南津佳広 (2012) 『通訳学 101-理論から実践まで』 大阪教育図書
鳥飼久美子 （編） （2013） 『よくわかる翻訳通訳学』 ミネルヴァ書房
牛込惟浩 (1993) 『サムライ野球と助っ人たち』 三省堂

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1. Hatsuko ITAYA (2017) “Interpreting strategies in the field of sports: From a study of professional baseball interpreters,” *Studies in Sports and Language,* No.2, pp.1-19. https://sportgengo.wixsite.com/home/2018（査読有り）

2. Hatsuko ITAYA (2017) “The Roles Expected of Sports Interpreters: From a Study Employing M-GTA on Professional Baseball Interpreters,” *Interpreting and Translation Studies*, No.17, pp. 23-43. （査読有り）

〔学会発表〕（計 8 件）

Hatsuko ITAYA (2019) “Instruction of Sport-Specific Interpreting Strategies in Interpreting Lessons: Pedagogical proposals based on the ethnographical study on baseball interpreting” presented in the 17thAnnual Hawaii International Conference on Education. 2019 年 1 月

板谷　初子「スポーツ通訳者に求められること-プロ野球通訳者の訳出方略から学ぶ-」第 5 回スポーツ言語学会大会　2018 年 9 月

板谷　初子「通訳者の透明性と訳出時間の考察　～プロ野球球団通訳の事例から～」北海道通訳翻訳研究会 2017 秋～冬大会　2017 年 12 月

板谷　初子「通訳における lengthening と shortening～政治通訳とスポーツ通訳の比較考察～」日本コミュニケーション学会北海道支部第 26 回支部研究大会　2017 年 11 月

板谷　初子「プロ野球球団通訳者の役割」日本通訳翻訳学会第 18 回年次大会　2017 年 9 月

板谷　初子「プロ野球球団通訳：『社会的側面』と『言語的側面』からの考察」第 4 回スポーツ言語学会大会　2017 年 9 月

板谷　初子「プロ野球通訳：『社会的側面』と『言語的側面』からの考察」日本通訳翻訳学会第 17 回年次大会研究発表　2016 年 9 月

板谷　初子「プロ野球通訳者の役割」日本通訳翻訳学会　研究法・論文執筆プロジェクト公開ワークショップ　2015 年 11 月

〔図書〕（計 1 件）

Hatsuko ITAYA　edited by Michael L. Butterworth *The Handbook of Communication and Sport*, de Gruyter Press　2020 年発行予定　総ページ 500 ページ（予定）執筆箇所ページ未定

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。